

耳も聴こえて言葉も話せる私にとって手話は非日常的で、言葉で伝える以上に相手に伝わりにくいのではないかと思っていました。だから題名にあって「手話だからいえること」の言葉が気になり、読むことにしました。

主人公である小学四年生の美和を中心に家族や友達とのことが描かれている物語です。仲良しの英知は人前ではうまく話せない場面かんもく症なので手話を使っていました。が、引っこしてからには美和と手紙で心を通い合わ

せます。英知の文章はいつも二行ぐらいの短いものですが、上手な絵がそえられていてそんなあたたかい手紙からも美和は元気をもらっていました。最初、美和は「メールやラインの方が楽なの」と思っていたものの、次第に英知からの返事が待ち遠しくなり、美和が期待しながらポストをのぞく場面は私もうわくわくしていました。言葉を話せる私にとっても友達からの手紙は嬉しいし、相手が一生けん命書いてくれた文字ひとつからも気持ち



が伝わってきます。美和と英知のやりとりを見て、やっぱり手紙で書くのももらうのもいいものだなと改めて感じました。

お母さんの再婚相手ラチャンは、コーダ（耳が聴こえない両親の元に生まれた聴者）で手話通訳士の仕事をしています。ある時、美和は本当のお父さんに会いたくなり、お母さんと喧嘩してしまいました。その時、部屋にこもった美和に寄りそったのがラチャン。お互い、本当のお父さんについて言葉にし

にくい場面ですが、話せる二人があえて手話を使ってやりとりをするのです。静かな部屋で美和の心がゆっくりとほぐれていく場面がとても好きです。私もお母さんとけんかした時は、話したくなかったり気持ちをどうやって伝えたらいいかわからなくなったりします。いやな空気を変えるきっかけの一言も思いつかずどんどん時間だけが過ぎていきます。でもそんな時、優しく手話で語りかけられたらほっとする気がします。言葉にしにくいこと



でも心の声を伝えてくれる手話は、まるで魔法のようだと思いました。

美和の優しさや強さにも心打たれました。

美和に妹が誕生しますが、耳が聴こえないという児とわかってても、逆に手話で話せることを喜べる美和がすごいと思いました。早産で生まれた私も赤ちゃんの時、耳が聴こえないかもと検査をしたそうです。もし自分が障害をもっていたら、今よりもっと強くないといけないのだらうなと思いました。障害を持って

いてもそれが不幸と考えるのは違うのかな、障害もその人の性格のようにとらえたらいいのかなと、この本を通して考えるようになりました。

私たちも手話を使えば、たくさんの人と分かり合えたり、表現力が豊かになったりすると思います。手話は素敵な言語で、口には出しにくいことも優しく伝えられます。私も手話を学んでいろんな人とコミュニケーションをとって友達を増やしていきたいです。